

服部英雄教授ご退官に寄せて

空閑, 龍二
元九州大学比較社会文化研究科事務部 : 事務官

<https://doi.org/10.15017/1508411>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp. 345-349, 2015-03-31. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン :
権利関係 :

服部英雄教授ご退官に寄せて

空閑 龍二

このたび服部英雄教授ご退官に際し記念誌発行計画を知りました。福岡に赴任されて二十年を経過しました。当時、九州大学に赴任された先生方は、無理強いに似て否応なく学内広報誌へ、自己紹介文を求められました。その寄稿文に、他の先生方と少し雰囲気異にし、ある種のオーラを発する紹介文がありました。他でもなく、当時の服部助教がやる気満々で九州入りをし、その活気溢れた寄稿文を組上の肴としました。新任の他の先生方は、手慣れた捌きで編集部の要請に、顔写真を添え穏やかな自己紹介文を寄稿されたが、只一人だけ自己紹介文に、発掘現場の図柄絵らしき貼紙を、入室部屋の扉に貼り付けた写真を、自己紹介文の顔写真代わりにする、妙に気にかかる新任教官の自己紹介文があった。

一 ユニークな自己紹介文

十数名の新任者中、お一人だけ寄稿文の初めの写真代わりに、何やら古墳の絵文字か判じもの風の絵を添えて、新任紹介にした見事な演出？、その自己紹介文に興味湧き、心惹かれたことを思い出したのです。『この先生はどんな方だろう？』と気を惹くこと疑いなしの自己紹介文だった。紹介文は大学の先生というより、こちらの叩き上げの男を思わせる啖呵風の、只者でない雰囲気滲んでいた。その一節、「政治や法律が嫌いで別の専門を選んだ、なのに長い役人生活に墜ちた？。でも一方で余人が知らないドエライ体験を多くし、まわり道に思えたが、我が本籍は歴史学と見通しを据えた・。」と。見ず知らず？の任地の最初の挨拶なら相場は「どう

かよろしく・。」が決まり文句にも思えたが、頭からそれと全く違っていた。一節を読んだ当時の気分を意識した。「自分の好きな道を望んだ筈が、どう間違ったのか！。望みもしない世界で、飛んでもない体験ばかりだった。ドエライ体験がそれだ。でもそのお陰で余人が知らない裏道を覗き見たが、やっぱり俺の本籍ではないと気が滅入った。ここに来て自分が求める本籍の道が見えた。だからこれからが俺の本気の戦場だ！大学も何かとうるさい役人さん相手の難所だが、どっこい役人生活は多少知ったから、硬軟織り交ぜた役人との付き合い方は、多少は心得ができた。九州ではただ本籍に向けて、余計な衝突はせずゆっくり、じっくりマイペースを守れそうだ！。これからが本籍・本道に復帰だ——！」と、蛮声に近い響きが行間に溢れ、気迫を実感した。何より新任地が己の将来を大きく拓く道と信じ、剛毅に「歴史が本籍」と公言する、まだ顔も姿も見ぬ人に大きな好奇心が湧いた。

ドエライ体験にまみれてもお、己の道を見失わぬ男に熱い心を感じた。なにやら腰の据わった人と思わせ、まだ見ぬ正直な言質の研究者に、心が吸い寄せられた。それを讀んだ年寄りは、期せずして共感した。そして二十年経った今も、他の新任者とは別格の気配を、いまだ衰えさせる風もなく持続し、なお本籍への道を真っ直ぐ歩き続ける気迫を感じさせられている。文中の「ドエライ体験」の一節は、若き日の筆者を回顧させ、わが身の体験を回想させる心惹く一節だった。筆者の無頼話をお許し戴く。五十数年前わけあって北九州黒崎で、底辺社会の醜い大人の世界を、否と云うほど思い知らされた生活体験をした。年寄りの「ドエライ体験」の青年前期だった。町中は今の中国風煤煙の日々、火野葦平描く糞尿譚物語そっくりの路地裏、一

週間で顔は脂ぎった。当時、大病院建設現場に、日銭を稼ぐ肉体労働者の大きな飯場(宿舍)があり、そこで職住どんだ『飯場生活』が私のドエライ体験だった。生きることに飢えた異様な男たちとの共同生活体験は、「まわり道に思えたが、わが本籍は……」に続く、私の「これではイカン……」と方向転換を決意させ、発奮し、しがらない役人に転身できた契機だった。面白くもない話だが、当時の服部助教のドエライ体験談が、私のドエライ体験を回顧させてくれた。服部先生の活気が伝わる文脈、私にとり懐旧の一節文であり、余韻は今も残る。「まわり道に思えたが……」の一節は、新任地に燃える先生の意気込みを語っていた。当時はまだ面識も無いまま、そんな先生に何かを教わりたいたいと思った。待てば海路の何とかというが、近年に至り、ひよんなことから厚かましいお願いをし、貴重なご指導の縁を戴くことができた。私事定年退職後の『歴史遊び』に我を忘れて没頭できる日々を得た。「門前の小僧、習わぬ経を読み」を地でゆく日々が今も手元にある。いま、先生の下で日頃学ぶ学生さんは、先生のお人柄ゆえの常に柔らかな物腰の中で、必ず大きな宿題を背負われ、豊かな学びの日々と数多くの試練を享受できる。先生もまた二十年経った今から、本籍への次なる一本道を始められることと信じます。末尾ながら私事、深く感謝を申し上げます。

二 赴任当時の大学事情から

服部先生が着任された当時の大学事情を資料として振り返りました。当時、私は六十歳定年まで僅かに年数を残す頃、仕事柄で大学の動きは大方が耳に届く立場でした。当時の話題には、**それ本当？ そんな馬鹿なことか！**と、問い直しようなことが頻繁にありました。事毎には多少のペールを被せ、オブラート包みする必要も感じますが、いずれにしろ当時の学内模様を経過時間軸にそって思い出してみました。

①平成六年(一九九四)四月一日が先生の形式上の九州大学着任でした。だがこの着任の元になる正式辞令交付は、三ヶ月後でした。その理由は終わりで説明します。赴任から退官までの二十年間のうち、着任直前の九州大学六本松教養部の喧騒話題、特に新制度発足後の**大学教育研究センター**の話から回想を始めます。

②九州大学教養部は過激な変革を迫られ、戦後、脈々と続いた**教養部教育**の全面的お色直しが第一、さらに学際的大学院専攻科を並立する第二の衣装変え、この二つの組織発足が同時進行で、キャンパスに二本立ての教育・研究組織が実現しました。

③先ず平成六年(一九九四)三月三十一日を以って教養部の廃止が先行しました。**九州大学教養部が廃止されたその日**、福岡版新聞紙上は賑やかな大見出しで、教養部廃止セレモニー報道が満載でした。新入学生の初期教育を担ってきた教養部は、全国的な教育変革の一端になりました。戦後教育で、学生の初期教育に献身された教官層、由縁の来賓の方々は、お別れセレモニー会場とした旧教室で、昔日を懐かしく淋しく回顧する一日になりました。

④教養部廃止の翌日、平成六年(一九九四)四月一日は、**旧教養部内に新組織・大学教育研究センターが発足する日**となりました。ところが奇妙な現実、教養部廃止は旧年度の話でさつさと実施されながら、翌日の新年度発足四月一日の組織正式変更は、官報に掲載されるまでの三ヶ月余りは、法律上での正式発足でなく、ずつと後の平成六年六月二四日となりました。大学教育研究センターと、大学院専攻科の法律上の始動は、四月一日ではなく三ヶ月遅れの六月二四日がスタートでした。その理由はあとで詳述しますが、服部先生ほかの新任教官の正式辞令発令も六月二四日でした。勿論、法律とは勝手なもので**六月二四日付**を以って、四月一日に遡及する辞令交付で、すべて形式上は解決されました。

三 六本松地区の変容

戦後長い間実施の教養部教育は、**新組織・大学教育研究センター**に移り、教育システムも変わり、専門学部所属の教官も大学教育研究センターに参画する新しい教育システムになりました。学部専門教育が本務の教官も四月一日を境に、新入学生の初期教育に参画し、当然ながらいずれの教官も複数のキャンパス間を移動し、授業を始めました。当時の箱崎・病院・六本松各地区キャンパス間を、教官自身が常に移動する新たな現実が生じました。

① 一方で学生も、授業科目を求め複数のキャンパス間移動が当然になり、教官・学生共にキャンパス間移動が激増し、この変則的な教官・学生の移動に陰の声で、丁度マジシャンパイの手混ぜ風に例えて「**ガチャ混ぜ制度**」と揶揄の声も聞こえた。教官が本務キャンパスから他キャンパスへ移動する交通実費はバス回数券が支給されました。教官所属地から他地区への移動を、ある種の出張旅費扱いが考慮され、そのつど回数券旅費支給でした。一方の学生は各人バス代実費負担です。学生は多額の授業料を前払いし授業を受ける権利がある中で、大学都合で時間毎に修学場所へ実費負担を強要されるのは如何か?という、雑多な声なき声も生じました。

② 学生父兄の反応に直面し、大学の苦心策が生まれます。六本松構内始発の学生専用私鉄バス運行でした。構内のバス発着導入で、学生は各キャンパス始業時間間に合う利便な運行が実現され、復路便も導入されました。乗車賃は学生実費負担のままでした。

③ 学生専用バスは私鉄バスが箱崎・病院地区への二系統間の臨時バス運行でした。学生は始業前に他キャンパスに正確に到着できるように、発着当初の乗車率は高く順風満帆、私鉄もえびす顔でした。時折、六本松構内で母親風の年配女性が学生に紛れ込み、途中で「天神で降ります」と悲鳴を上げる一般乗客のハプニングもありました。運転手が困り果て、学生爆笑の話でした。新入生の土地勘が育つ夏前には利用

率は急速に落ち、当初やる気満々の私鉄バスも、乗車率の低下は費用対効果上、営業リスクとなり、やがて運行は中止です。

④ 実は臨時バス運行は意外な展開を招きます。六本松構内発着バス実績が、他キャンパスへ導入の契機になったのです。数年後、病院内バス発着の検討が始まり、他大病院の運行実施を参考にして、九大病院来院患者用に、病院内から路線バスの運行が実現しました。瓢箪から駒の話ですが、バス会社折衝担当者が本学卒業生で、六本松バス運行が契機になり、市民向けバス路線が実現しました。

四 比較社会文化研究科の創設

① 六本松キャンパスの二つ目の変容は**新設研究科・比較社会文化研究科**の設置です。研究科最大の懸案は教官スタッフ充実であり、比較社会文化研究科が目指す教育・研究目標などは、早い時期から教養部改組とセットで全学検討が進められ、学際教育・研究に不可欠な専攻設定や教育カリキュラムは、全学的な検討の課題で、教官候補者の選抜検討も全国に適材者を求めるなど、難題続きでした。これらは教養部改組検討と並行し早くから、全学会議で取り組まれ多様な議論が交わされ、発足は五里霧中の思い、責任を担う教官層苦汁の日々でした。

② 新研究科創設検討は、六本松地区教官による、日に夜を継ぐ奮闘で継続され、勿論、奮闘教官を支え続ける人々の姿も当然でした。今では携帯電話が便利ですが、当時はポケットベルが一抹の救い、緊急にポケベルで『用件ありのベル』を鳴らせど、先方がベルに気づかねば何の役にも立たない常でした。また文部省(現文部科学省)とのFAXの情報交換も、大学会議の結果を発信しても返事は来ない!、文部省担当官は当時の国会が紛糾中で議場内、FAXは伝わらず国会終了後に帰庁しFAXを読み、関係者間で検討後の返信は、いつも深夜近くで、FAX往来も不自由でした。

③ 新研究科発足で、すべての教官を学内横滑り配置など、専門性や斬新さの点

不相当と文部省の厳しい指摘もあり、一方ですべて学外者招聘も夢のまた夢、無理難題でした。当時の新研究科検討委が抱えた最大の難題でした。新研究科がめざす専門性に視点を置き、より適性の学内教官を慎重に登用しつつ、外部登用の人事構想が進められました。

五 結びとまとめ

①さて当時の六本松情報誌(平成六年(一九九四)十月五日付、全学共通教育広報No.2)を読み返すと、発足後の比較社会文化研究科の日本社会文化専攻には、十四名の教官名があります。又、言語文化部は語学部門として旧教養部スタッフが横滑り体制が可能で、他大学から四名、学内から昇任者三名ほか、新採用者三名の顔ぶれでした。服部英雄先生は、日本社会文化専攻の助教授として、文化庁から転身された新進の若き研究者でした。

②先生の自己紹介文を昔に振り返って読むまでもなく、本籍を歴史におく先生の歴史学の主張は、その後も何の銜てらもなく実践され、その歴史勉強の流儀は多くの学生に浸透したはずで。

私自身もある種の心的感化を受け、定年を前に「若い頃に読んだ柳田國男の歴史への常套手段」を思い起こし、「退職後の毎日が日曜となる日々は、あちこち巡ること」に目標を置き、十数年後一つの実を得ることができました。

「止まらずに歩き、現地で見聞し、必要な書を読む」ことが、私自身の、十数年来の生活でした。

③最後に、「二 赴任当時の大学事情から」の④について話題の補足をします。妙な大学人事発令についての話です。二十年前当時、服部助教授が赴任された平成六年(一九九四)の正式辞令交付年月日は、平成六年六月二四日でした。ご本人はお忘れでしょうが、四月に着任し、正式な国の辞令なしで福岡生活を始められたので

す。前にも述べましたが、実は当時の国会は、年末に向け、みっともない国会会期中で、政治不在の連続でした。本来は国の予算は年度末前に成立すべきが、新年度、平成六年度政府予算は未だ成立せず、さらに新年度に入っても成立しなかった。政界与・野党の国民無視の不始末の極みで、国会予算通過は、平成六年六月二四日でした。国中のすべてが見込み商いで動き、六月二四日を以つて九州大学の新機構発足、大学教育研究センターと比較社会文化研究科の辞令交付となったのです。平成六年度の政府予算が大学に到達されない以上、大学内のすべての四月一日付けの正式人事異動発令はなく、旧所属のまま、あるいは最寄の部局の預かり仮辞令が乱発されました。当時の六本松職員の仮の所属は、本部事務局預かりや直近部局の辞令でした。教官所属も似たような形式でした。すべての部局の仮住い人事異動がまかり通ったのです。それは九州大学だけでなく全国すべての国家機関の新年度人事異動日が、六月二四日の社会現象となった日でもありました。生活の糧となる給与などは、概算見込みで支払われたため、現実的な飢えは生じなかったものの、近年、米国でも似たニュースがあつたことを思い出しています。思えばさまざまな話、当時の回顧はなお尽きない思いがあります。

当時の政界をふり返ると、平成五年(一九九三)八月初めに細川首相が誕生するが、翌年四月二九日に羽田首相に代わり、一ヶ月後の六月三十日に村山富市首相が誕生した。そんな混乱時代の中の大学でした。

④二十年前の回想として書き連ねましたが、その結果がどうであったかは今後の評価になることでしょう。当時、服部先生と同じように、外部から九州大学に着任された先生方の中には、「新たな研究テーマ」をどう見出そうかと、苦悩気味に自己紹介文に書かれた先生もあり、まさに新たなスタートの困難を実感させる年でした。そして六本松地区キャンパスはやがて消え、元岡へ移転し、跡地は市街化されて面影は次第に消えかけています。

(元九州大学比較社会文化研究科等事務部事務官)

《ユニークな自己紹介文》についての補記》

冒頭書出し文で、紹介写真代わりの判じ画の話を書いた。原稿を一読した先生は途端に笑い出した。赴任当時、幼ない子息が「お父さんの顔」を描いた絵だったという。確かに、上が髪の毛で、下の二つの四角がめがね風、教えられて人物画と合点した。幼児の絵の特徴で二〇年前の現実だった。でも顔写真代わりに子息の絵を堂々と掲載できる胆力は、やはり只者でない新任者だと今に思う。

